

加, 室温 25°C にてかくはんしながら 30 分 incubation し, そのまま患者に投与すればよい. ただし標識率と投与後 1 日目のフリー ^{51}Cr をチェックしておく必要がある.

27. フェリチンのラジオイムノアッセイ法の検討

林 大三郎
(名大・放 RI)
齋藤 宏
(同・放)

われわれはフェリチン測定にサンドイッチ法(スパックフェリチン)を使用してきたが, 測定値に疑問点が生じたので, 二抗体法(ガンマダブフェリチン)の検討も交えて, その再検討を行った.

スパックフェリチン(Y)とガンマダブフェリチン(X)の相関は, $Y=1.068X-12.4$, $r=0.985$ であった. 中, 高濃度では双方に値の差は少ないが, 低濃度ではスパックフェリチンがかなり低目の値となった. 正常値でも同一検体でスパックは, 男, 102.9 ± 61.8 ng/ml, 女 22.4 ± 16.3 ng/ml であったのに対して, ガンマダブは, 男 109.4 ± 56.9 ng/ml, 女 36.0 ± 24.4 ng/ml となり, 低濃度で差が大きかった. 精度は, ガンマダブで $CV=2.3 \sim 5.0\%$ でスパックは $CV=5.5 \sim 13.9\%$ であった. スパックでの回収率は低濃度(14.4 ng/ml)で 77.9%と低かった. また, スパックの高フェリチン血清の測定において, B/T(%)の低下(逆転現象)がみられ, 希釈再検の要否の規準は 300 ng/ml 以上から行なうことが望ましい. また, 希釈値は感度, 精度からみて 80~190 ng/ml に入る値が最も信頼できるものと思われる.

28. 貧血検診におけるフェリチン(Ft)とTIBC, UIBC, SIのラジオアッセイの臨床的意義

齋藤 宏
(名大・放)
林 大三郎
(同・放 RI)

女子48名, 男子29名からなる某社の健康診断にさいし, Ft, TIBC, UIBC, SIの測定を行ない, 貧血, 特に鉄欠性貧血(IDA)の頻度をしらべた.

女子のうちFtを測定したのは46例で, 貧血(Hb 12 g/dl以下)は5例, そのうちIDAは4名(9%)であった. IDAではないが貯蔵鉄欠乏(ID)を示したのは41名(89%)に達した. 男子にはIDAは1例もなかったが, 慢性肝炎でFt高値例があった. これらの疾患の発見上, Ftはきわめて有用であった. 貧血はあるがFtは正常範囲程度のもは女子で1例みられた. IDA例では, Ftは10 ng/ml以下, TIBCは400以上, SIは43 $\mu\text{g/dl}$ 以下, 飽和度は10%以下であった.

正常人男子と女子との間には著しいFt値の差がみられた. Ftの測定には第1ラジオアイソトープ社 Spac と, トラベノール社ガンマダブを用いた. Spacは低Ft値側で低い値を示し, IDAでは6 ng/ml以下であった. ガンマダブは10 ng/ml以下であった. IDA発見率は両社のFt値に差はあっても, 同率であった. 9%のIDA発見率は米国の成績とも一致する.

29. ガンマーコートシステムによる甲状腺検査($T_3\text{U}$, T_3 , T_4 , FT_4)法の検討

林 大三郎
(名大・放 RI)
齋藤 宏
(同・放)
満間 照典
(愛知医大・内)

われわれは, 試験管固相法(ガンマコート)による $T_3\text{U}$, T_3 , T_4 , FT_4 を検討した.